近世における中世王朝物語享受の一様相

――入江昌喜書き入れ本『海人の刈藻』を中心に――

小川陽子

要　旨　入江昌喜書き入れ本『海人の刈藻』を中心に、近世期における中世王朝物語享受の一端について検討する。昌喜は享保七〈一七二二〉年に生まれ、寛政一二〈一八〇〇〉年に没した大阪の町人学者である。『海人の刈藻』のほかに『松浦宮物語』への書き入れや随筆における『松陰中納言物語』への言及も確認でき、従来知られていた国学者たちとは別の文化圏においても中世王朝物語が享受されていたことがうかがわれる。

はじめに

いわゆる中世王朝物語が研究の対象とされるようになったのは、近世期のことであった。その成果は、物語目録のように一つの書物としてまとめられた場合もあるが[1]、主として各物語写本の行間等に付された注記の形で伝わっている。しかしその具体的な享受の様相について、十分に知られているとは言い難いのが現状であろう。「鎌倉時代物語集成」（市古貞次・三角洋一氏編　昭63～平6・笠間書院）や「中世王朝物語全集」（平7～・笠間書院）等の刊行により、信頼できる本文が続々と提供されつつある状況は非常に喜ばしいことであるが、その一方で、知られざる伝本を掘り起こし、現存諸本の様相とそこに書かれた情報とを確認していくことも今後なお継続されるべきであろうと考える。

本稿ではその一例として、近世における『海人の刈藻』享受を取り上げたい。調査の結果、先行研究で未紹介の伝本五点ならびに黒川春村による『海人刈藻物語系図年立』[2]が現存することが明らかとなった。また新出伝本のひとつは大阪の町人学者である入江昌喜（享保七〈一七二二〉～寛政一二〈一八〇〇〉年）の書き入れ本であるが、彼の随筆には『海人の刈藻』だけでなく『松陰中納言物語』からの引用も認められる。従来の研究により、清水浜臣や本居宣長といった国学者たちを中心として物語写本が流通していたことが知られているが[3]、そういった国学者サークルの圏外においても中世王朝物語が享受されていたという事実はあまり注意されてこなかったように思われる。

『海人の刈藻』は、知られるとおり、原作本と改作本の二種が存する。『無名草子』『明月記』『物語二百番歌合』『風葉和歌集』にその名と物語内容とが記されているが、夙に明らかにされているように、これらはいずれも現存本

と異なる内容すなわち原作本についての言及である。その後、長きにわたってこの物語への言及は確認されない。山岡浚明の『古物語目録』ならびに『類聚名物考』においてようやく論究されるものの他資料から物語名を引用したに過ぎず、現存本（改作本）についての具体的な評言は黒川春村の『古物語類字鈔』を待たねばならない。本稿では、その間の享受史を埋める資料の一部として、先述の資料類のうち、特に入江昌喜書き入れ本『海人の刈藻』を中心に考察を行うこととしたい。

一　資料紹介

本論に入る前に、これまでに報告されていた『海人の刈藻』の伝本を確認しておく。『補訂版　国書総目録』によれば、以下の十六本が認められる。

国立国会図書館本、静嘉堂文庫本、宮内庁書陵部本、実践女子大学本、筑波大学本二種、東北大学狩野文庫本、徳島県立図書館本、県立山口図書館本、島原図書館松平文庫本、彰考館本二種、尊経閣文庫本、天理図書館本、三手文庫本、大阪市立大学森文庫本

また右の一覧によれば実践女子大学は一本所蔵のようにあるが、常盤松本と黒川本の計二本が蔵されていることが塩田公子氏[4]によって報告されている。具体的な本文については、桑原博史氏が、十伝本について書誌を詳述され、「とくに系統をわかつほどの明確な本文異同はない」[5]ことを明らかにしておられる。また平林文雄・島田早苗両氏によれば、「特に系統を分つほどの差異はないが、強いて分つとすれば、共通する異文の存在などにより、三つの系統に分類することができ」[6]る由である。

右の諸本に加え、このたび新たに確認することのできた伝本は、次の五本である。

Ⅰ　東海大学附属図書館桃園文庫蔵本①（桃一二　五）

外題「あまのかるも全」（表紙左肩打付書）。袋綴じ一冊、帙入り。薄茶色無地紙表紙、本文斐楮交漉紙。二七・四×一九・八㎝。一面一二行。全一三九丁（巻一・四〇丁、巻二・三五丁、巻三・二六丁、巻四・三八丁）。奥書なし。蔵書印なし。本文末尾に添付された紙には「江戸初期書写　金千二百円　あまのかるも」とあり、「書肆淺倉屋」の印がある。随所に朱で他本との校合の書き入れあり。

（参考・書き入れ例）

・五せちりんしのまつりこちつかきしよのいとまなさに

・うへ人の御いほねにも

・をしなへて八十うち人の……　↓頭注「此下句前ニおなし如何」（朱書）

・あまのかるもにすむゝしのわれからつらき人おほく

↓この丁に「あまのかるもにすむゝしの　此物語名ノ起ルコトコレナルベシ」と書かれた紙片あり（墨書）

・三位中将にもよくこそのたまへはおほしめしへたつきかはなときこえ給御さかつきのついてにさす三位中将に（以下ナシ）

Ⅱ　東海大学附属図書館桃園文庫蔵本②（桃一二　六）

外題「あまの刈藻」（表紙中央打付書）。袋綴じ一冊、帙入り。墨流紙表紙、本文雁皮紙。一四・九×二一・四㎝。一面二五行。全八〇丁（巻一と巻二は改行もなく連続して書写。巻三冒頭はちょうど丁変わりに位置し、第一行を空け

て書写。巻四冒頭は丁の途中で巻三末尾のあと約二行空けて書写)。奥書なし。「月明荘」印(朱印、巻末)。横本で、かなり細かな字で書写されたもの。随所に墨で書き入れあり。

(参考・書き入れ例)

・母君(宮ィ)ににたてまつらせ給て

・殿上なりつるかこを(羯鼓)

・こぢぶきやうのだうに侍(故 治部卿房歟)

・きよけなる女中の三十四十にやと見ゆるも有

・くらからん神代のことを……　→頭注「くらからんは草昧の意」(墨書)

Ⅲ　ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵本①(黒二　E三六)

外題「あまのかる藻　上(下)」(題簽表紙中央)。袋綴じ二冊。墨流紙表紙、本文楮紙、見返し本文共紙。二七・二×一九・五㎝。一面一二行。奥書なし。蔵書印「物語」(丸朱印、表紙右肩)、「黒川真道蔵書」(朱印、前遊紙ウラ)、「黒川真頼蔵書」(朱印)、「黒川真頼」(丸朱印)、「幽遠窟」「蔵」(朱印)(以上一丁表)。上巻表紙右肩に、「入江獅々童書入」と墨で打付書、「蜑の苅藻　二巻/入江獅々童書入本」と墨で書かれた紙片(八・〇×三・一㎝)あり。朱による頭注、傍注多数あり。ごく一部に墨の傍注もあり。黄土色の不審紙も随所にあり。

Ⅳ　ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵本②(黒四　E三五)

外題「あまのかるも　一(〜四止)」(題簽表紙左肩。しかし本来は表紙左肩に打付書であったと思しい。第四冊表紙

左肩に「海人加類裳」と打付書されており、文字の左半分にかかる形で題簽が貼られている）。袋綴じ四冊。藍鼠色布目紙表紙、斐楮交漉紙（模様入り）、見返し本文共紙。本文二七・三×一九・四㎝。一面一〇行。柱に丁付けあり。蔵書印「物語」（丸朱印、表紙右肩）、「黒川真道蔵書」（朱印、前見返しウラ）、「黒川真頼蔵書」（朱印）、「黒川真頼」（丸朱印）、「和學講談所」（朱印）（以上一丁表）。表紙右肩に「真道校本」と墨で打付書。扉（前遊紙）右肩に「入江獅々童校本校合」と朱書。第四冊末尾に「明治三十六年十月一読了　黒川真道」と朱書（その横に「待價」朱印あり）。各冊前遊紙ウラに朱で当該巻の年立てあり。随所に朱点、朱書き入れあり。朱の色から見て、すべてが一度に書き入れられたのでなく、少なくとも二度にわたって書かれた可能性が高い。

V　八戸市立図書館蔵本（南15　217.4.2.3のうち）

＊以下の記載は国文学研究資料館HP公開「日本古典資料調査データベース」による

（平成十九年八月二十日現在。調査カード整理番号　73999-00148）

外題・内題なし（所蔵者整理書名「山水のかたかけたるを2、3冊のうち」）。袋綴じ。一巻一冊、全四巻中前半二巻の零本。青灰色表紙、本文楮紙。二四・〇×一九・二㎝。一面九～一〇行。全八七丁（遊紙前後各一丁）。書き入れなし。南部家旧蔵本。

右のうちV八戸市立図書館本は、既述のとおり国文学研究資料館のホームページにおいて公開中の「日本古典資料調査データベース」によるものである。同データベースでは桑原氏、平林・島田両氏未調査の大阪市立大学森文庫本についても簡略ながら書誌が公開されている。同データベースには、V八戸市立図書館本がまさにそうであるように、

『補訂版国書総目録』『古典籍総合目録』に未収載の伝本が搭載されている可能性が大いにあり、今後なお諸本の博捜が求められる中世王朝物語研究にとって有効なツールとなりうるであろうことを申し添えておきたい。

さて、このたび直接に本文を調査しえた四伝本は、いずれも朱ないし墨による書き入れが施されている。それぞれについて、校合跡から他本との関係を明らかにすること、振り漢字や語注などから本文の読みへ還元させていくこと等、さまざま研究が広がる可能性はあるが、本稿では特にⅢノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵本①に注目していきたい。

Ⅲは、傍線を付したように「幽遠窟」「蔵」という蔵書印を有し、「入江獅々童」による書き入れ本であることが二箇所にわたって明記されている。二箇所の記載が誰の手によるものであるか判然とせず、また奥書も存しないが、「幽遠窟」「蔵」の朱印が入江昌喜すなわち獅々童のもの[7]であることから、この本が入江昌喜手沢本であったことは事実と認められる。後述するようにⅢに書き入れられた注は、他の三書に比して詳細で、かつひとつの定まった観点からこの物語を読み解こうとした形跡がうかがえるため、以下具体的に取り上げることとしたい。

なお当該書は、黒川真頼・真道の蔵書印があることからも明らかなように、昌喜の手を離れたのち黒川家に収蔵され、現在に至るわけであるが、黒川家において他本との校合に用いられたことがⅣノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵本②の扉右肩の朱書「入江獅々童校本校合」によって知られる。

二　入江昌喜による『海人の刈藻』読解

入江昌喜の生涯や人となり、著書については、森繁夫氏によって詳細な研究がなされている。彼の古典籍蒐集は、

四十七歳の頃には既に養子昌久に世を譲り、高津に隠棲の宅を構へ幽遠窟と稱してゐた。（略）高津に隠棲以前からであらう、昌喜は俳句和歌に興じ古書の渉猟を事とした、別段に記録は無いが、其古典を引用し論述せるところに見れば、夥しき典籍類を有したと察せられ、その富力を行使し蒐集したと思はるることは、後年養嗣子たる壽喜（石亭）が、古書畫の所藏家を以て世に鳴つたといふ一事にも知るべきである。[8]

といった状況であった。それだけ多くの書物を集めた一方で、学問的には契沖に私淑するのみで、特定の師を持たず門人もいなかった由である。[9] この点について森氏は、

師承は無かつたが師と頼む人はあつた、それは實に國學の大先達契沖阿闍梨であつた。（略）昌喜は師範とするに古典を撰び、古人を目標とし、就中同じ大阪の先輩たる契沖に私淑し、凡そ契沖の著述に關する限り、悉く入念讀破し、相通はず相言はざる師として學んだのであつた。故に昌喜の述作考證を見るに、説として契沖を引かざるなく、言として契沖に及ぼさざるなしといつてもよい程であるが、此無言の師を範としたことは、愁ひに凡庸の師承を得たのに比し、寧ろ賢明な方法であつたであらう。

と述べておられる。

その昌喜が大量に蒐集した書籍のひとつが、本稿で取り上げる『海人の刈藻』であった。すなわち当該書への書き入れは、昌喜自身の興味を発端とし、独自の知識と見解とをもって施されたものと考えられるのである。それは、たとえば『石清水物語』が本居宣長の手を経て、宣長の書き入れをも含めて門人たちの間で転写が繰り返されたのとは事情が異なるわけである。[10]

昌喜の書き入れは、具体的には、引き歌の指摘や『源氏物語』等を用いての語釈、振り漢字、衍字等の本文考証、異文注記と多岐にわたる。その中にあって特徴的と思われるのが、人物比定ならびに年次比定に関連する注記である。

以下、特にこの点について見ていきたい。

『海人の刈藻』は、五節、臨時の祭、二宮の袴着といった行事ごとが一段落したある時期を物語開始の時間として設定し、帝が姫宮たちに琴を教えるという日常の出来事から語り起こされている。続いて頭中将と中宮の対話、帝による権中納言と三位中将お召しなどがひとしきり語られたのち、ようやく、「この頃の帝は、故冷泉院の二の皇子になんおはします」と登場人物たちの血筋に関する紹介が始まる。その人物紹介場面に対し、昌喜は次のように注している。

このころのみかとはこ冷泉院の二のみこになんおはします一の宮は一条院ときこしておりみさせ給みこもおはしまさすひめ宮一ところ皇太后宮の御はらにいてきさせ給しは斎宮にてくたらせ給たうたいはこうきてんの女御ときこえさするは右大臣(兼家公歟)とのゝひめ君にてまた春宮ときこえしよりまいり給てこまやかなる御おほえは人よりことにおはせしか御はらに女一宮女三の宮うみたてまつり給ふ（巻一・上四ウ／一三頁）(11)

〔頭注〕故冷泉院の二のみこ　三条院也(12)

一条院は圓融院第一之御子寛和二年七月廿二日即位寛弘八年六月十三日譲位十月十六日三条院即位改元長和元年右大臣とのゝ一兼家公歟大鏡云三条院東宮にて御元服せさせ給ふ夜の御そひふしにまいらせ給て三条院もにくからぬものにおほしめしたり云々

傍線部アウ右大臣14を兼家、イ故冷泉院の二の宮を三条院とそれぞれ見立てていることがわかる。さらに頭注中ほど、四角囲みを施したように一条院についての記載がある。これは本文波線部、故冷泉院の一の宮である一条院に関する注と思しく、二の宮および右大臣の場合とは異なって、「一条院は圓融院第一之御子」以下、歴史上の一条天皇に関する事蹟が記されている。すなわち物語中の一条院をそのまま実在の一条天皇と見たてての注となっているの

である。そしてその一条院に関する注末尾に「十月十六日三条院即位」とあることから、この場面で昌喜は一条院を主体として人物関係を把握し、史上の一条天皇に次いで即位したのが三条天皇であったことを踏まえて、物語中の「この頃の帝」をも三条院と見なした注を付しているものと見てよいだろう。この帝[3]は後に物語中で「冷泉院」と呼ばれることから、その名前のみを念頭に置くならば実在の冷泉天皇と見立てて注してもよかったはずであるが、そうはせず、あくまで一条院との関係によって判断しているのである。

この一条院＝実在の一条天皇と見立てての人物把握は、以後の注記においても認められる。物語中の帝たちはそれぞれ、即位順に、

（物語における帝）　故冷泉院　一条院　冷泉院　朱雀院　帝

（昌喜の注記）　円融[13]　一条　三条　後一条　後朱雀

と注記されているのである。一条院の他はいずれも物語中の呼称と一致しておらず、いみじくも物語最後の帝[1]の即位にあたって「譲位三条院ヨリ次第ニ見レハ此受禅後朱雀院也」（巻四・下五四ウ／二〇八頁）とあるごとく、即位の順に従ってそれぞれ実在の帝に見立てられているものに他ならない。物語始発部に示した人物把握が、末尾に至るまで一貫していることが認められよう。

このことは年次比定の問題へもつながっていく。

しはすのつこもりとさためてたいふのめのとむすめの中将の君とこのほか女房廿人。四人なととゝのへ給ふ

（巻二・上三二オ／六〇頁）

（頭注）寛弘七年十二月

巻二冒頭、新中納言15と按察使中の君22との結婚の日取りが十二月晦と決まり、準備が進められている様を描いた場面。傍線部、結婚の日取りについて、昌喜は「寛弘七年十二月」と頭注を付している。以下、寛弘九年（七六頁）、寛仁二年歟（八六頁）、寛仁三年（一一〇頁）、寛仁四（一五五頁）、寛仁五治安元年歟（一九一頁）のように、順に年次比定がなされている。これによれば、物語は巻二から巻四中途にかけて（六〇～一九一頁）、寛弘七〈一〇一〇〉年から治安元〈一〇二一〉年のおよそ十二年にわたる年月を描いていることになる。しかし実際のところ、この間に描かれているのは、物語第二年から第九年の八年間である。この相違は、昌喜の注記が、物語の年次推移そのものでなく、物語外に根拠を求めてなされたものであったことを示していよう。その根拠とは、まさに先述の人物比定と同じく、歴史上の天皇に関わるものであった。昌喜は、人物比定、特に天皇の比定に準じ、主に御代変わりを基準として物語中の年次を歴史上の年次に当てはめているのである。

Aかくいふはしも月一日ころなるにはかに一条院うせ給ぬとて殿よりはしめて院のうちはさりともいはす内にもおとろかせ給ふ事かきりなし（巻二・上四一オ／七五頁）

〔頭注〕一条院崩御ノコト日本紀畧云寛弘八年六月廿二日甲子午刻太上法皇崩于一条院中殿年卅二云々大鏡同こゝと相違如何

Bかくてをくりむかふるとしなみに十月に御くにゆつりのことありて御心まふけのまゝれんせいゐんにいらせ給春宮（後一条院）御位につかせ給へる二の宮（敦良）春宮にたゝせ給（巻二・上四六オ／八三頁）

〔頭注〕三条院は帝子傳云長和五正九禅位云々

後一条院同書云長和五正九受禅同九二七即位云々大鏡云長和五年丙辰五月廿九日位につかせ給云々相違改元寛仁

まずAでは、物語第三年十一月初旬の一条院崩御が語られているのに対し、昌喜は歴史上の一条天皇崩御の日時を

『日本紀略』ならびに『大鏡』によって確認し、破線部のように物語と史実との相違を指摘する。[14] この場面からほどなくして物語は「としもくれぬ（略）二月の一日ころに…」（巻二・上四二オ／七六頁）と第四年目に入るのであるが、当該箇所頭注は「寛弘九年」とある。これはAの頭注二重傍線部、実在の一条天皇が寛弘八年に亡くなったことに準じての理解と見てまちがいないだろう。同じことはBにもいえる。Bは物語第五年の十月に譲位がなされたことを記す箇所であるが、頭注では複数の史料を引用し、実在の三条天皇から後一条天皇への譲位が長和五年すなわち寛仁元年になされたものであることを確認している。昌喜はこれを踏まえ、以下物語で年が改まるたびに、「寛仁二年歟」（八六頁。物語第六年）、「寛仁三年」（一一〇頁。物語第七年）のように注記するのである。

以上のように見てくれば、昌喜の『海人の刈藻』読解の根本に、〈物語中の一条院＝史実上の一条天皇〉という図式があることが認められよう。ではなぜ昌喜はこのような理解にいたったのであろうか。ひとつには物語中の「一条院」という呼称の影響があろう。しかしどうやらそれだけではなかったようである。

ここで少し目を転じて、他の物語における昌喜の注記を確認しておきたい。

天理大学附属天理図書館所蔵の『松浦宮物語』（913.4　イ21）一冊は、一丁表に「幽遠窟」「蔵」という朱印が存することから、入江昌喜旧蔵本であったことが知られる。『海人の刈藻』と同じく随所に朱で頭注や傍注が付された写本である。しかし物語中の帝を特定の天皇に比定することや、年立てと史実とを照合させるようなことはなされていない。注記はいずれも語釈や引き歌の指摘にとどまるのである。このような『松浦宮物語』に対する様相と比べたとき、『海人の刈藻』に対するそれは独特のものであったことが認められよう。

そもそも『海人の刈藻』は、『無名草子』の「言葉遣ひなども、『世継』をいみじくまねびて、したたかなるさまなれ」[15]という評言に導かれるところもあって、現代の研究においても年代記的な物語としてとらえられてきた。[16] 昌喜

のように本物語の人物を歴史上の人物に准えて読む、いわば歴史物語的なとらえ方が生ずる要因は、『海人の刈藻』の側にこそあったことがうかがえよう。

また一方で、物語の細部においても、歴史物語との関連が見てとれる。

斎院はたうたひ一条院なとの御はらから女四宮[17]にておはしますに御さしきより殿二宮（兼家公歟）いたきたてまつらせ給てさしいて給へるに御こしのうちより御あふきにあふひをうちをかせ給てさしいてさせ給へる兵衛のすけ給はりて殿にたてまつるをみたまへは

くらからん神世のこともわすられてあふひのひかりみるそうれしき（巻一・上一六ウ／三一頁）

〔頭注〕大鏡第四云當帝や東宮なとのまた宮たちにておはします時祭見せ奉らせ給し御さしきのまへ過させ給ほと殿の御ひさに二所なからすゑまゐらせ給ひて此宮たち見奉らせ給へと申させ給へはみこしのかたひらよりあか色の御あふきのつまをさし出給へり

巻一、葵祭において関白12が二の宮1を抱いているところへ斎院から葵とともに和歌が送られる場面である。昌喜が指摘するように、『大鏡』師輔伝に見える寛弘七年の葵祭における著名な一こまを踏まえた描写と見てよいだろう。[18]『栄花物語』巻第八「はつはな」にも同場面があり、『海人の刈藻』がいずれの資料に基づいて描き出したものかは定かでないが、歴史物語を作品中に取り込もうとしたことは間違いないと思われる。

以上のように見てみれば、入江昌喜による書き入れ注は、本物語と史実とを徹底して照応させようとする昌喜の読みを伝える一方で、歴史物語性という作品そのものが持つ特質をも浮かび上がらせるものであるといえよう。

なお本稿はじめに触れたように、現存本『海人の刈藻』はいずれも改作と思しい。しかし昌喜は原作本の存在を知らなかったのか、成立に関する記述は皆無である。あくまで眼前にある物語をどう読み解いていくかという点に関心

が寄せられているのである。

三　入江昌喜の物語享受

さて前節では、入江昌喜による『海人の刈藻』書き入れ注を見るとともに、彼が『松浦宮物語』をも読解していたことを確認した。単なる書写にとどまらず、注釈を施し、一歩踏み込んで作品世界を理解しようとする昌喜のあり方は、近世における中世王朝物語享受を知る上で注目しておいてよいと思われる。ここでは彼のものした随筆に目を転じ、昌喜の物語享受についてさらに確認しておきたい。

『幽遠随筆』は昌喜によるはじめての著作で、安永三〈一七七四〉年に刊行されたものである。その一部には長年古典に親しみ研究した成果としての諸種の記事[19]が含まれており、

○古物がたりの名。「とをきみ、「殿うつり、「をり河、「月待ツ女、「しらゝ、「国ゆづり、「あさうつ、「こまのゝ物語、「ぬれぎぬ、「野べの昔。（一〇九頁）[20]

といった散佚物語に関する覚書も見える。その他の記事からも、

岷江入楚、栄花物がたり、源氏、おちくぼ物語、万水一露、伊勢物語、真名伊勢物語、うつぼ物語、大和物語、竹取物語、栄花物語、続世継物語

のように、作り物語や歴史物語の書名を多数拾うことができる。彼の物語全般にわたる広範な関心がうかがわれると同時に、『岷江入楚』『万水一露』のような大部な注釈書にまで目を向けていたこと、すなわち表層的な理解にとどまらず、先学の研究成果に基づき、より深く物語を読解しようとしていたことが知られよう。

そして中世王朝物語に関連してより興味深いと思われるのが『久保之取蛇尾』である。同じく昌喜による随筆で、天明四〈一七八四〉年に刊行され、のち嘉永三〈一八五〇〉年に再刊された作品である。[21] こちらも『幽遠随筆』と同じく、

伊勢物語、大和物語、うつぼ物語、河海抄、源氏物語、岷江入楚、栄花物語、竹取物語、住吉物語、狭衣、続世継、濱松中納言物語、水鏡、大鏡、花鳥余情、増鏡、海士のかる藻物語[ア]、松陰中納言物語[イ]

といった作品の名が散見される。そのひとつとして傍線部ア『海人の刈藻』も含まれ、具体的には次のような形で本文引用がなされている。

○五月を嫁娶に忌はいにしへよりの事也。（中略）海士のかる藻物語にさ月はいむ月なりとの給ふと云々。是は中宮御懐妊にて内裏を出給ふをいへり。此月何事をも忌にや。異苑曰、俗以五月為悪月云々。しかるを今の俗五月はいはひ月とて、嫁娶にも忌む事なく、二三月、四月、六七月、八月なんどを忌事になりぬ。（後篇　二二一頁）[22]

○世俗に、いたく泣をさめ〴〵となくといふは、雨のふるごとく泣といふなり。（中略）又おひ〳〵といふて泣といふも、讃岐典侍日記に、堀川院かくれ給し所に云、たゞおはしますらん所へ、我を召せや、おひ〳〵とくどきたてゝ泣るゝ音すと云々。又海士の刈藻物語に云、ひきあけて見給へば、からだもなく、紫雲にうつり給ひぬ。ひしりかなしくておう〳〵と泣給ふと云々。（後篇　二三五頁）

○鄙俗の語に、頬（ホヽ）をほゝがまちといひ、又打擲（ちく）をハルといふ。たとへばホヽがマチハルなどいへるも、いにしへよりの俗語と見えたり。（中略）海士の刈藻物がたりに、あまりにはしらのたちければにや、侍従をひきかなぐりうちはりなどしてといへり。（後篇　二三九頁）

○俗に少の事を露ちりほどといふも、うつぼ物語吹上巻に、いとけうある人に見たまへつきて、露ちりも参り侍ら

ざりつるといへり。又露ほどもといふも、海士ノ刈藻物語に、

＼たのめ置しめじが原の露ほどもあはれをかけて君だにもとへ（後篇　二四七頁）

それぞれについて昌喜書き入れ本『海人の刈藻』を確認すると、次のようにある。

・さ月はいむ月なりとの給（巻四・下二八オ／一六五頁）

・ひきあけてみたまへはからたにもなくやしうんにうつり給ぬひしりなこりかなしくておう〳〵となき給ふ（巻四・下四五ウ／一九四頁）

・あまり　はらのたちけれはにや侍従をひきかなくりうちはりなとして（巻三・下一〇ウ／一三三頁）

・たのめをくしめちかはらの露ほともあはれをかけて君たにもとへ（巻二・上五九ウ／一〇五頁）

波線を施したように、『幽遠随筆』に引用された本文との間には若干の異同が存する。これは、随筆をものするにあたってやや曖昧な、おおらかな引用態度で臨んだ結果であるのか、あるいは、執筆時に右と異なる写本を持っておりそちらに基づいて引用したのか、判断しがたいところである。

さて、中世王朝物語の享受という面でもうひとつ注目すべきは、本稿はじめにも簡単に触れたように、傍線部イ『松陰中納言物語』への言及が見える点であろう。これは、

○もの書たるがつたなきを、みみずのやうにといふも、信明集に云かへりごとに、（中略）又鳥の足がたのやうにといふも、松陰中納言物語山の井巻に云かぎりにこそ侍れ。我ゆゑに御つみのふかくわたらせ給はんこそ心にかゝれと、鳥の足がたのやうにいとはかなく書たりと云々。（後篇　二四〇頁）

とあるもので、具体的な本文が引用されていることから、昌喜がこの作品に直接接したことは疑いない。これまでに知られている『松陰中納言物語』の伝本は、(23)

①東北大学図書館本（五巻一冊）　※新写本の山岸文庫本あり
②天理図書館本（竹柏園旧蔵、五巻五冊）
③天理図書館本（西荘文庫旧蔵、五巻二冊）
④尊経閣文庫本（五巻五冊）
⑤中野幸一氏本（三巻一冊、巻四・五欠）
⑥名古屋図書館本（巻二欠、四冊）　※戦災焼失。新写本の山岸文庫本、国文研本あり
⑦水戸彰考館本（三冊本）　※戦災焼失
⑧水戸彰考館本（二冊本）　※戦災焼失
⑨山口図書館本　※現存確認されず

の計九本。[24] もちろんこの他にもまだ知られていない写本やすでに失われた写本がいくらか存しようが、それにしても、広範に流布したとは考えがたい残存状況といえよう。その中にあって、具体的に本文を引用した昌喜の随筆は、本作品が近世において確かに享受されていたことを伝える貴重な証言資料と考えられるのである。

おわりに

以上、本稿では、入江昌喜書き入れ『海人の刈藻』を中心に、近世における中世王朝物語享受の一端をたどってきた。昌喜の書き入れや随筆は、いわゆる国学者たちとは別の文化圏においても中世王朝物語が熱心に読まれていたことを如実に物語っている。

残念ながら昌喜の旧蔵書は現在諸処に分散して伝わっており、その物語享受の全貌を正確にとらえることは容易でない。しかし、ひとつひとつの写本や随筆等をたどることにより、具体的な読解の様相や本文の伝来を明らかにすることができたならば、これまで知られてきた以上に重層的な中世王朝物語享受史を構築しうるのではないだろうか。

たとえば、本稿で取り上げた資料のひとつ、昌喜旧蔵『松浦宮物語』（一冊本）は、本文中途に「猪苗代謙宣本為三冊自是中之巻」と記されている。誰の筆によるものか明らかでないが、「謙宣」はおそらく「謙宜」の誤りで、猪苗代謙宜所持本に関する情報を書き留めたものであろう。猪苗代謙宜（兼誼とも）は、いわゆる中村本『夜寝覚物語』の旧蔵者で、その人となりについては永井和子氏[25]に詳しい。永井氏は、謙宜奥書本『住吉物語』に言及された上で、次のように述べておられる。

兼誼は、住吉、にとどまらず、他の物語類をも、或は書写し、或は読み解いたであろうことが、自ら推測される。こうした物語類に記した彼の奥書がこのほかにもどこかに残されているかも知れない。

昌喜旧蔵『松浦宮』の記載は、このご推察を裏付けるものといえよう。なお、天理図書館蔵『しのびね』（一冊本）は、「しのひね二巻上下　平入道謙宜」「以猪苗代謙宜本令騰写一校了　寛政三辛亥年冬十月上旬」とある由[26]。『夜寝覚物語』『住吉』『松浦宮』『しのびね』と、いずれも今日では中世王朝物語に分類される物語類に、謙宜の関心が寄せられていたことが知られよう。昌喜と謙宜の関係については未詳であるが、それぞれの没年が昌喜・寛政一二〈一八〇〇〉年、謙宜・享和三〈一八〇三〉年であること、謙宜が『夜寝覚』に奥書を加えたのが宝暦六〈一七五六〉年であること等[27]を勘案すれば、二人がほぼ同時期に活動していたものと認められる。何らかの接点を持っていた可能性も考えられよう。

おそらく昌喜にとって中世王朝物語は、数ある古典籍のうちの一部に過ぎなかったであろう。しかし中世王朝物語

研究の側から見たとき、昌喜や謙宜の存在は非常に興味深い。彼らの物語享受の実態を明らかにすること、それを中世王朝物語享受史へ正確に位置づけていくことは、今後の課題としたい。

〔注〕

(1) 近世における物語目録の展開については、小川「物語目録の生成と展開—中世王朝物語享受文化圏の解明に向けて—」(『中世王朝物語の新研究』平19・新典社)にてその一端を論じた。

(2) ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫所蔵。黒川春村『古物語類字鈔』の「海人の刈藻」項において「此書、古寫二本もて、考訂して、系圖・年立をも作りおきぬ。別巻として、附録にそふべし」と言及のある「系圖・年立」に相当すると考えられる(前掲注1拙稿)。

(3) 物語写本の流通については、中島正二氏(「物語たちの近世」(『魚津シンポジウム』第11号　平8・3)、「物語たちの分類学」(『江戸文学』第22号　平13・2)、「物語たちの失敗」(『日本文学』第52巻10号　平15・10)、西本寮子氏(「『とりかへはや』蓬莱氏本系統の伝本をめぐる考察—本居宣長の奥書を起点として—」(『国文学攷』第178号　平15・6)、「誰が読んだのか—江戸時代の『とりかへばや』享受—」(『日本文学』第54巻2号　平17・2)等に詳しい。

(4) 塩田公子氏「『海人の刈藻』改作試論」(『名古屋平安文学研究会会報』第13号　昭60・12)

(5) 桑原博史氏「あまのかるも物語について」(『中世物語の基礎的研究資料と史的考察』初版昭44、三版平1・風間書房)

(6) 平林文雄・島田早苗氏「『海人の刈藻』(巻一)対校本(宮内庁書陵部本・尊経閣文庫本・彰考館文庫本)」(『群馬県立女子大学紀要』第6号　昭61・3)

(7) 『新編蔵書印譜』(平13・青裳堂)。なお「獅々童」の名については森繁夫氏が次のように述べておられる(「入江昌喜翁」(『入江昌喜翁』昭19・入江昌喜事蹟顕彰會)。

獅々童は、「幽遠隨筆」の序に自書し、また俳句短冊に此署名あるのを見受ける、攝津名所圖會大成には獅々堂とあり、所謂俳名といふべきものである。

(8) 森氏前掲注7書。なお歌書の蒐集については、曽根誠一氏「小沢蘆庵の家書収集と入江昌喜—架蔵本『海人手古良集』を手懸かりとして—」(『花園大学国文学論究』第32号　平16・12)に詳しい。

(9) 『国書人名辞典』「入江昌喜」項（平5・岩波書店）

(10) 『石清水物語』の現存諸本は四系統に大別される（桑原博史氏「石清水物語について」〈桑原氏前掲注5書所収、初出は「文学語学」43号〈昭42・3〉）。このうち第三系統の諸本はいずれも、外題「正三位物語」とし、「正三位物語柴田常昭の本をかりてうつさせたる一かへりよみあはせたゝしつ　寛政六年八月十一日　本居宣長」との奥書を有する。『石清水物語』の諸本については、広島平安文学研究会「『石清水物語』伝本書誌稿」「同・その2」（『古代中世国文学』第19、20号〈平15・6、平16・1〉）を参照されたい。

(11) 以下、本文の引用はノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵本①により、その所在を、巻数、上下冊の別、丁数、表裏の別、「中世王朝物語全集」（妹尾好信先生校訂・訳注　平7・笠間書院）の頁数の順に記す。また登場人物の呼称が複雑であるため、適宜「中世王朝物語全集」における人物番号を四角囲みで付記した。

(12) 「故」は「後」を抹消して上書きしたもの。

(13) 史実において一条天皇の前代は花山天皇であるが、物語中の一条院は「故冷泉院」の御子とされている。このため昌喜は、「故冷泉院」を一条天皇の父円融天皇と見立てているものと考えられる。

(14) なお、崩御の月だけでなく年齢についても、物語中の一条院が亡くなったのが「五十に二はかりたらせ給御よはひ」（巻二・上四二オ／七六頁）であったと記されているのを承け、「一条院御齢も相違」と頭注で指摘している。

(15) 『無名草子』の引用は「新編日本古典文学全集」による。なお先述したとおりこの評言は『海人の刈藻』原作本に対するものである。

(16) 妹尾好信先生「『海人の刈藻』私見」（『国文学攷』第126号〈平2・6〉）、三角洋一氏「『海人の刈藻』の文学史的位相」（『王朝物語の展開』〈平12・若草書房〉、初出『リポート笠間』第31号〈平2・10〉）ほか。

(17) 「女四宮」は、右傍に「四勧子内親王」、左傍に「五宣子内親王歟」と朱書したのが抹消された跡がある。

(18) 現代の注釈においても同様に解されている。関恒延氏『海人の刈藻全訳注語句総索引』（平3・右文書院）参照。

(19) 「日本随筆大成」第一期16巻解題（昭51・吉川弘文館）

(20) 引用は前掲注19書による。

(21) 「続日本随筆大成」第11巻解題（昭56・吉川弘文館）

(22) 引用は前掲注21書による。

(23) 当該箇所は、「中世王朝物語全集」(阿部好臣氏校訂・訳注　平17・笠間書院)一三頁にあたる。

(24) 栗山元子氏の諸本整理(『中世王朝物語・御伽草子事典』平14・勉誠出版)による。このほかに、椙山女学園大学本が平成6年度中世文学会秋季大会にて展示に供されていた由、中島正二氏よりご教示を賜った。同展示資料によれば、「旧名古屋図書館(現鶴舞中央図書館)蔵、河村秀根旧蔵本の透写本。昭和10年、岡田稔による写。原本は戦災で焼失。」とのことである。

(25) 永井和子氏「中村本夜寝覚物語の伝来」(『寝覚物語の研究』初版昭43、再版平2・笠間書院)

(26) 桑原博史氏「しのびね物語について」(桑原氏前掲注5書所収)

(27) なお、綿抜豊昭氏によれば、『御用雑記』(陽明文庫蔵)宝暦八年四月十九日条に、「申法橋　法橋兼恵男兼誼卅七歳」とある由(「隣松軒兼寿」『近世前期猪苗代家の研究』〈平10・新典社〉)。この記載を信ずれば、宝暦六年、謙宜は三十五歳であった。

〔付記〕

貴重なご蔵書の閲覧をお許しくださった諸機関ならびに関係者の方々に記して御礼申し上げる。また本稿は、中世王朝物語研究会例会(平18年12月15日　於立教大学)における口頭発表をもとに改題、加筆修正を施したものである。発表に際し貴重なご教示を賜った会員各位に深謝申し上げる。

なお本研究は科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。